家族意識研究の展開（1）

――「家」意識の測定――

木　下　栄　二

A.　本稿の課題

家族意識とは，「家族という社会関係について個人および人々がもつ，価値づけと規範および家族行動に対する態度」（石原1982：120）と規定でき，家族研究の中心の一つに位置づけられる。特に様々な形で家族のゆらぎが指摘される今日，家族意識研究の重要性は増大している。しかし，状況に引きずられた場当たり的な研究の繰り返しでは，家族のゆらぎを捉えることは難しい。現代の家族像がゆらいでいるならばいるほど，研究の側には，従来の研究の展開を踏まえた，地に足のついた研究が要請されよう。

それでは，従来の家族意識研究は，どのような展開を辿り，どんな問題を抱えているのか。家族意識研究整理の試みは，変動する家族像を捉えるためにも必要な作業であろう。本稿では，その作業の一環として，「家」意識に焦点を当てた研究に限定し，さらにその中での「家」意識の測定に絞って若干の整理を試みる。

「家」意識に焦点を当てた研究は，戦後の民法改正によるいわゆる「家制度」の廃止をうけて，家族意識研究と言えば「家」意識の研究と言っても過言ではないほど，その展開の中心をなしてきた。また，実証的な研究に限定しても，既にある程度の蓄積があり，既存研究の整理検討が可能な段階に，言い換えれば整理検討が必要な段階に達している。

このような状況のなかで，「家」意識を扱う家族意識研究の問題点は現在，大きく2点に収斂しつつある。一つは「家」をどのように概念化するかという概念構成に関わる問題であるが，もう一つは「概念の精錬にもさらなる検討が必要であるが，今日なお幼稚の域を脱していないのは，変化の測定法である。」「大胆に尺度を試用するのでなければ，変化の程度や速度についてはいつも印象的な記述でお茶を濁すほかないことになる。」（森岡1993：39）と指摘されるように，「家」意識をいかに測定するかという問題である。両者は当然結びついた問題であるが，本稿では特に測定の問題に絞って若干の検討を行ってみたい。なぜならば，「家」意識を測定する設問は数多く存在しているが，それらは個々の研究の中での工夫に終わることが多く，家族意識測定の体系的発展にはなかなか結びつきにくいという現状にあると思えるからである。

そこで本稿では，「家」意識測定の重要なポイントに，従来の質問文の整理検討があると考えて，既存研究における質問文をリストアップして提示し，さらに家族意識測定の際の問題点についての整理・検討を試みてみたい。

B. 方　　法

(1) 検討対象の限定

最近の家族に関する実証的研究の中にも，「家」に関する質問項目をみることができる。例えば，1994年に発行された『家庭と社会に関する意識と実態調査報告書』（経済企画庁国民生活局編）にも，「男の子がいない場合，養子をとり家を継がせる」「子供のうちひとりは家業を継ぐ」「長男は，ほかの子とは異なる特別な役割がある」「子供のうちひとりは家名を継ぐ」「先祖伝来の墓は大切に守って子供に伝える」の5項目に対する賛否を問うことで「家」意識を測定している。また，同じく1994年発行の『現代社会と家族の変容に関する研究3　都市の家族とパーソナルネットワーク』（ニッセイ基礎研究所）でも，「長男は，結婚しても親と同居するのがよい」という意

見への支持の度合いから，「家」意識の影響を読み取ろうとしている。このように，「家」意識に関する項目は現在の家族像を捉えるためにも無視できない。しかし一方，「家」意識を捉える質問項目は様々であり，一定しているわけではない。

それでは，「家」意識を直接対象とする研究ではどのような質問項目で「家」意識を測定してきたのか。本稿では，「家」意識の実証的研究論文に限定して，代表的と思える18本（文献リスト参照）を取り上げて，そこでの質問項目をみてみることとしたい。

図1　使用データの種類による分類

（1）　官公庁・新聞社等の全国規模世論調査を2次資料とした研究
　青井1974，田村1974，森岡1980，石原1982，松成1991
（2）　研究者個人及び研究者グループの調査データを使用した研究
　（a）　継続調査による研究
　　松成1988，1989，堤1993（以上，勝沼調査）
　　柄澤1992（秋田・岡山調査）
　（b）　単発調査による研究
　　（b-1）　都市・農村比較調査
　　小山1960，柏熊1960，光吉1986
　　（b-2）　農村部の調査
　　菅谷1984
　　（b-3）　都市部の調査
　　加藤1987，高橋1987，藤井1987，木下1988，杉岡1989

なお取り上げた論文を，利用しているデータの種類から分類したのが図1である。(1)官公庁・新聞社等の全国規模の世論調査結果を2次資料として利用した研究（青井1974，田村1974，森岡1980，石原1982，松成1991）と(2)研究者個人及び研究者グループの調査データを使用した研究に大別し，さらに後者を(a)継続調査による研究（松成1988，1989，柄澤1992，堤1993）と(b)単発調査による研究に区分した。また継続調査がいずれも農村部を調査対象地とするのに対して，単発調査には（b-1）都市・農村比較型（小山1960，柏

熊1960，光吉1986)，(b-2) 農村調査（菅谷1984)，そして（b-3）都市部を調査対象とするもの（加藤1987，高橋1987，藤井1987，木下1988，杉岡1989）がある。

(2) 質問文リストの作成

次に，各論文から「家」意識測定に関する質問文リストを作成する。そのため，各論文の論述のなかで用いられている質問項目を全てリストアップし，各質問項目を質問文に再現した（「関連調査一覧」参照)。なお，この作業の過程で，完全には再現できなかった（もとの調査の不明・未入手などのため）ものも若干残っていることをお断りしておく。

関連調査一覧

（1） 官公庁等による全国レベルの世論調査（単発調査）

総理府　1949「人口問題」（全国，20～50歳，3,500名） （引用文献）石原1982 （備考）総理府国立世論調査所『世論調査報告書　第3巻（昭和24年度調査)』社団法人日本広報協会
農林省？　1951「農地相続世論調査」（北海道を除く全国郡部，農家世帯の20歳以上，2.000名） （引用文献）石原1982 （備考）総理府国立世論調査所『世論調査報告書　第4巻（昭和25年度調査)』社団法人日本広報協会
総理府国立世論調査所　1952「婦人と青少年についての調査」（全国，20～59歳，2.500名） （引用文献）石原1982，松成1991 （備考）国立世論調査所，1952，「婦人と青少年についての調査」総理府広報室（調査番号26-19)，総理府国立世論調査所『世論調査報告書　第6巻（昭和26年度調査)』社団法人日本広報協会
総理府国立世論調査所　1953「家族制度に関する世論調査」（東京区部，20～54歳，600名） （引用文献）青井1974，石原1982，松成1991 （備考）国立世論調査所，1955，「家族制度に関する世論調査」。戸田貞三・福武直『家族・結婚』松尾書店，276-286。総理府国立世論調査所『世論調査報告書第7巻（昭和27年度調査)』社団法人日本広報協会

総理府国立世論調査所　1953「老後の生活についての世論調査」(全国65市町村, 20～59歳, 2.000名) (引用文献) 青井1974 (備考) 総理府国立世論調査所『世論調査報告　第7巻(昭和27年度調査)』社団法人日本広報協会
総理府　1956「家族制度に関する世論調査』(全国, 20歳以上, 3.000名) (引用文献) 青井1974, 田村1974, 石原1982, 松成1991 (備考) 内閣総理大臣官房審議室, 1957,「家族制度についての世論調査」総理府広報室『調査報告書(31-7)』, 1-78
読売新聞　1964「日本人のこころ」(全国, 有権者, 3.000名) (引用文献) 石原1982
内閣総理大臣官房広報室　1966「社会的関心に関する世論調査—家庭意識について」(全国, 全国の夫・妻1.500名ずつ) (引用文献) 青井1974 (備考) ?下段「家庭生活意識に関する世論調査」と同一か?
総理府　1966「家庭生活意識に関する世論調査」 (引用文献) 田村1974　(備考) 総理府『世論調査年鑑(昭和41年版)』208-213
総理府　1968「家族法に関する世論調査」(全国, 20歳以上, 3.000名) (引用文献) 青井1974, 田村1974, 森岡1980, 石原1982, 松成1991 (備考) 内閣総理大臣官房広報室, 1969,「家族法に関する世論調査」, 総理府『世論調査年鑑昭和44年版』, 101-106
総理府青少年対策本部　1972『青少年の性意識』(15～24歳の未婚の男女とその親, 未婚男女5.000名, 親1.000名) (引用文献) 青井1974
総理府広報室　1972「婦人に関する意識」(全国, 18歳以上の男女, 女20.000名, 男3.000名) (引用文献) 青井1974　(備考) 総理府『世論調査年鑑(昭和48年版)』115-142
総理府広報室　1973「風俗・性に関する世論調査」 (引用文献) 青井1974　(備考) 総理府『世論調査年鑑(昭和48年版)』165-170
総理府　1974「老親扶養」(全国, 30～49歳の夫とその妻, 60～74歳の老人, 10.289名) (引用論文) 石原1982

NHK 1975 「追跡調査Ⅲ」(全国，20歳以上，2.000名) (引用文献) 石原1982
総理府 1979 「家庭基盤の充実」(全国，20歳以上，5.000名) (引用論文) 石原1982 (備考) 総理府『世論調査年鑑(昭和55年版)』153-159
総理府 1982 「社会福祉」(全国，20歳以上の男女，3.000名) (引用論文) 松成1991 (備考) 内閣総理大臣官房広報室，1983，「社会福祉」，総理府『月刊 世論調査 5月号』2-42 総理府『世論調査年鑑(昭和58年版)』151-155
毎日新聞社 1988 「家族・政治問題」(全国，20歳以上の男女，3.000名) (引用論文) 松成1991 (備考) 毎日新聞社，1990，「家族・政治問題」，総理府『全国世論調査の現況(平成元年版)』474-480
総理府 1989 「長寿社会における男女別の意識の傾向に関する調査」(全国，30～70歳未満の男女，3.000名) (引用論文) 松成1991 (備考) 総務庁長官官房老人対策室，1990，「長寿社会における男女別の意識の傾向に関する調査」，総理府『全国世論調査の現況(平成元年版)』152-157
総理府 1989 「戦後ベビーブーム世代の生活意識」(全国，昭和22年1月1日～24年12月31日生の男女，3.000名) (引用文献) 松成1991 (備考) 内閣総理大臣官房広報室，1990，「戦後ベビーブーム世代の生活意識」，総理府『全国世論調査の現況(平成元年版)』147-153

(2) 官公庁等による全国レベルの世論調査(継続調査)

毎日新聞社 (1950，52，55以降隔年)「全国家族計画調査」(全国，有夫の50歳未満の女性，2.500名) (引用文献) 青井1974，森岡1980，石原1982，松成1991 (備考) 毎日新聞社人口問題調査会編，1990『記録日本の人口—少産への軌跡』家族計画世論調査・20回全資料
統計数理研究所 (1953年以降5年間隔)「国民性調査」(全国，20歳以上の男女，3.000～6.000名) (引用文献) 森岡1980，石原1982，松成1991

（備考）統計数理研究所，1984，「国民性の研究第７回全国調査」『研究リポート60』，統計数理研究所，1990，「国民性の研究第８回全国調査」『研究リポート68』39-45

総理府　（1956，57，65，68，71）「憲法に関する調査」（全国，20歳以上の男女，20.000名）
（引用論文）石原1982

総務庁青少年対策本部　（1972年以降ほぼ５年間隔）「世界青年意識調査」（11ヶ国，18～24歳の男女，約2,000名）
（引用文献）青井1974，石原1982，松成1991
（備考）総理府青少年対策協議会編，1973，『世界の青年・日本の青年――世界青年意識調査報告書――』大蔵省印刷局。総務庁青少年対策本部，1989，「世界青年意識調査（第４回）報告書」

ＮＨＫ放送世論調査研究所　（1973年以降５年間隔）「日本人の意識」（全国，16歳以上の男女，約5.400名）
（引用文献）石原1982，松成1991
（備考）ＮＨＫ放送世論調査所，1985，『現代日本人の意識構造第２版』日本放送出版協会，ＮＨＫ放送世論調査所（秋山登代子・高橋幸市），1989，「日本人の意識の15年」『放送研究と調査』2，3月号，日本放送出版協会，ＮＨＫ世論調査部（編）『現代日本人の意識構造　第３版』ＮＨＫブックス

総務庁長官官房老人対策室　（1981，1986，1990）「老人の生活と意識に関する国際比較調査」（５ヶ国，60歳以上の男女（施設入所者を除く），約1.000名）
（引用文献）杉岡1989
（備考）総務庁長官官房老人対策室，1987，『老人の生活と意識』中央法規出版

（３）研究者個人および研究者グループによる調査（単発調査）

家族問題研究会(代表・小山隆)　1956「現代家族の研究」＊，（東京区部，近郊，山村の３地域，世帯主およびその配偶者，計769名（Ｂ票回収数））
（引用文献）小山1960，柏熊1960
（備考）小山隆（編），1960，『現代家族の研究』弘文堂

光吉利之　1976「異居親子関係に関する実証的研究」＊，（大阪阿倍野区と兵庫県春日町，夫婦二人暮らし，夫55歳以上，子ども全員既婚，別居，うち少なくとも１名は男子という属性をもつ夫婦世帯，計281名（分析対象））
（引用文献）光吉1986。

ＦＬＣ研究会(代表・森岡清美)　1982「中高年の家族生活史と世代間関係」（静岡

市，1918～1937年の生まれの有配偶男子世帯主とその妻，およびその親と子供，394名（家族意識の分析対象者））
（引用文献）藤井1987，
（備考）森岡清美・青井和夫（編）1987『現代日本人のライフコース』日本学術振興会

都市家族研究会(代表・三谷鉄夫)　1982「家庭生活に関する調査研究」（札幌・仙台・福岡，有配偶者，1.531名（分析対象）
（引用文献）加藤1987，杉岡1989，
（備考）三谷鉄夫，1988，『現代都市家族論』都市家族研究会

菅谷よし子　1983「宮城県志波姫町調査」＊，（宮城県志波姫町，農家世帯の母およびその子世代の妻，計118名）
（引用文献）菅谷1984。

高橋正人　1985「生活と意識に関する調査」（東京都葛飾区，65～79歳までの男女，305名）
（引用文献）高橋1987。

木下栄二　1987「大都市マンション居住者の家族意識に関する調査」（東京近郊のマンション一棟，世帯主，129名）
（引用文献）木下1988。

＊調査名称不明のため，筆者が便宜的につけた調査名

（4）研究者個人および研究者グループによる調査（継続調査）

森岡清美他　（1966，72，81，92）「勝沼調査」＊（山梨県勝沼の二夫婦揃いの世帯115世帯（第一回調査時）
（引用文献）松成1988，1989，堤1993

福武直他　（1953，1968，1985）「秋田・岡山調査」＊（秋田県S地区の農家310世帯，岡山県U地区の農家252世帯（第3次調査）
（引用文献）柄澤1992
（備考）高橋明善・蓮見音彦・山本英治（編），1992，『農村社会の変貌と農民意識』東京大学出版会

＊調査名称不明のため，筆者が便宜的につけた調査名

表の見方

調査主体　調査年度　調査名（調査対象条件等）
（引用文献）本報告中あげた実証論文のうち当該調査を引用・利用している論文
（備考）当該調査の詳細を知るための文献

また，質問文リストの分類・整理にあたっては，石原邦雄（石原1982）が提示した家族規範の８側面（「配偶者の選択」「家業の継承」「結婚後の親との同居」「扶養義務」「相続」「あととり・養子」「先祖崇拝」「性別役割」）に依拠して，各側面に該当する質問文をまとめた。「家」意識測定の分類の軸にはほかに，「社会的地位の継承」「財産相続」「先祖祭祀」の継承関係に注目する森岡清美（森岡1976）の提案や，「規模と構成」「結婚後の居住」「活動の分担」「出自」「権威」「結婚」「結婚の解消」「相続・継承」「家族内の優位的ダイアッド」の９点から「家」と現代家族を対比する正岡寛司（正岡1976）の試みなどがあるが，家族生活諸側面をカバーする範囲の広さと，当初から実証研究の整理を念頭においているという２点から，石原の８側面の分類を採用した。

なお，この８側面には該当せず，紙幅の都合もあり，今回のリストには掲載しなかった設問もある。代表的な項目をあげておくと，「家族主義―個人主義に関わるベングッソン尺度」（菅谷1984，藤井1987），「本家・分家関係」「親の無理」（柄澤1992），「性意識」（青井1974），「家の中心」（柏熊1960），「昔と今の比較」（青井1974），「新旧家族制度への態度」（柏熊1960，青井1974）などである。

C．質問文リストの検討

それでは，各側面にどんな質問文があるのだろう。またここでは，側面のなかに様々な事柄があることを考慮して，どのような事柄から家族意識を測定しようとしているかという点を中心に，各側面のなかに下位区分をたてた。また，各質問文の測定しようとする意識のレベルも一定ではない。必要に応じて，意識の測定レベルでの区分にも言及する。

①「あととり・養子」：この側面は，「家の伝承性」（青井1974），「家の継承意識」（田村1974），「イエの継承」（菅谷1984），「社会的地位の継承」（松成1991）などという項目のもとに整理される場合も多く，「家」意識測定の

中心側面とも言える。

質問文リスト

あととり・養子

（あととりについて）

（1） 「あなたは，一家にあととりが必要だと思いますか，必要ないと思いますか。」

1. 必要である 2. 必要ない 3. 一概にいえない 4. わからない

（出典）総理府「家族法に関する世論調査」（1968）／（引用文献）青井1974，田村1974，石原1982

（2） 「あなたは，あととりの一番大切な役割は何だと思いますか，この中（回答票）ではどれでしょうか，1つだけあげて下さい。」

1. 家名を継ぐこと 2. 先祖の墓を守ること 3. 家業を継ぐこと
4. 親の住んでいる土地，家屋を継ぐこと 5. 親を扶養すること 6. この中にはない・わからない

（出典）総理府「家族法に関する世論調査」（1968）／（引用文献）石原1982

（3） 「家のあととりの最も重要な役割はなんでしょうか。次の中から二つだけ選んで下さい」

1. 家名（家系）継承 2. 家業継承 3. 土地（農地，山林）相続 4. 家屋敷相続
5. 先祖供養（墓を守る） 6. 親の扶養 7. 親類との付き合い関係の継承・維持
8. 家族全員の生活に責任を持つ 9. その他 0. 無回答

（出典）福武直ら「秋田・岡山調査」(1953，1968，1985）／（引用文献）柄沢1992

（養子について）

（4） 「子供がないときは，たとえ血のつながりがない他人の子供でも，養子にもらって家をつがせた方がよいと思いますか，それともつがせる必要はないと思いますか。」

1. つがせる 2. つがせない 3. 場合による

（出典）統計数理研究所「国民性調査」(1953以降継続）／（引用文献）田村1974，森岡1980，石原1982，松成1991

（5） 「仮に，子供が一人もいない場合には，あなたは養子を迎える必要があると思いますか，どうですか。」

1. 必要がある 2. 事情による 3. 必要がない 0. わからない

（出典）家族問題研究会「現代家族の研究」（1956）／（引用文献）小山隆1960，柏熊1960

（6） 「子供がない場合は養子を迎えるべきだ」（伝統から近代への11段階評価（サーストン法））

（出典）家族問題研究会「現代家族の研究」（1956）／（引用文献）小山隆1960

（7） 「あなたは，子供が一人もいない場合，養子をとる方がよいと思いますか，その必要はないと思いますか。」

1. 養子をとる方がよい　2. その必要はない　3. わからない
（出典）総理府「家族法に関する世論調査」（1968）／（引用文献）青井1974，田村1974。
（8）「つぎに，夫婦に子供が一人もいない場合には，養子を迎える必要があるでしょうか」
1. 必要がある　2. 必要がない　3. 事情による　4. DK
（出典）高橋正人「生活と意識に関する調査」（1985）／（引用文献）高橋1987
（9）「子供が一人もいない場合は，養子を迎える必要がある」
1. そう思う　2. 大体そう思う　3. あまり思わない　4. 思わない
（出典）木下栄二「大都市マンション居住者の家族意識に関する調査」（1987）／（引用文献）木下1988
（婿養子について）
(10)「仮に，娘だけで，息子のない場合には，あなたは娘に婿養子を迎えたいと思いますか，それとも，よそ（他家）に嫁入りしてもかまいませんか。」
1. 婿養子を迎える　2. 嫁入りしてもかまわぬ　3. 事情による　0. わからない
（出典）家族問題研究会「現代家族の研究」(1956)，FLC研究会「中高年の家族生活と世代間関係」(1982) 菅谷よし子「宮城県志波姫町調査」(1983)／（引用文献）柏熊1960，菅谷1984，藤井1987
(11)「かりに娘だけで，息子のいない場合には，娘に婿養子を迎えた方がよいと思いますか，それともよそに嫁入りしてもよいでしょうか。」
1. 婿養子を迎えた方がよい　2. 嫁入りしてもよい　3. 事情による　4. DK
（出典）森岡清美ら「勝沼調査」（1972，1981，1991）／（引用文献）松成1988，堤1993
(12)「男の子がいないときは，養子をもらってまで家をつがす必要はない」
1. 賛成　2. 反対　3. どちらともいえない
（出典）光吉利之「異居親子関係に関する実証的研究」（1976）／（引用文献）光吉1986
(13)「それでは，娘だけで，息子がいない場合には，娘に婿養子を迎えた方がよいでしょうか」
1. 迎えた方がよい　2. その必要はない　3. 事情による　4. DK
（出典）高橋正人「生活と意識に関する調査」（1985）／（引用文献）高橋1987
(14)「娘だけで息子がいない場合，娘に婿養子を迎える必要がある」
1. そう思う　2. 大体そう思う　3. あまり思わない　4. 思わない
（出典）木下栄二「大都市マンション居住者の家族意識に関する調査」（1987）／（引用文献）木下1988

リストには14の質問文を掲載し，「あととり」((1)〜(3))，「養子」((4)

～(9)), そして「婿養子」((10～(14)) の3つの下位区分をたてた。

②「家業の継承」:「継承」という観点からみると，極めて重要に思える側面であるが，産業構造の変化によって家業自体が少なくなったためか，この側面を取り上げている研究は少なく，リストに載せた質問文も5個と少ない。

しかし，質問内容をみると「子どもの職業」((15)～(16)) と「親の職業（あるいは家業）の継承」((17)～(19)) に関する質問に分かれ，さらに前者は「子どもの職業一般」(15),「子どもの職業に対する親の意見尊重」(16) を問う質問に，後者は兄弟順位を限定しないで「職業（家業）の継承」(17, 18) を問う質問と長男に関しての「職業（家業）の継承」(19)を問う質問に分類できる。

家業の継承

（子どもの職業）

(15) 「お子さんが大きくなったら，何になってもらいたいと思いますか」
1. 子供の自由に任せるもの 2. 家業をつがせるもの 3. 特定の職業をあげたもの 4. 親として決めたい意図はあっても具体的にははっきりしないもの 5. 不明

（出典）総理府「人口問題」（1949）／（引用文献）石原1982

（子どもの職業・親の意見）

(16) 「子供は職業の選択にあたっては親の意見を尊重すべきである」
1. そう思う 2. 大体そう思う 3. あまり思わない 4. 思わない

（出典）木下栄二「大都市マンション居住者の家族意識に関する調査」（1987）／（引用文献）木下1988

（親の職業（あるいは家業）の継承）

(17) 「それでは，子供たちのうち誰かは親の仕事をついだ方がよいでしょうか」
1. ついだ方がよい 2. つがなくてよい 3. 事情による 4. DK

（出典）高橋正人「生活と意識に関する調査」（1985）／（引用文献）高橋1987

(18) 「家業（家の職業）がある場合，親はそれを継がせるように努力すべきである」
1. そう思う 2. 大体そう思う 3. あまり思わない 4. 思わない

（出典）木下栄二「大都市マンション居住者の家族意識に関する調査」（1987）／（引用文献）木下1988

（親の職業（あるいは家業）の継承・長男）

(19) 「親が自分の仕事を子につがせることを望んだ場合，長男というものは，できるだけ親の仕事をついだ方がよいでしょうか」

1. ついだ方がよい　2. つがなくてよい　3. 事情による　4. DK
（出典）高橋正人「生活と意識に関する調査」（1985）／（引用文献）高橋1987

③「性別役割」:「この側面は，「家」固有のものとはいえない」（松成1991：87）とも言えるが，「夫は仕事（勤め），妻は家庭を守るという分業スタイルは，日本では封建武士の伝統を引いて，近代におけるサラリーマン家庭に受けつがれた家族観であり，夫唱婦随，男尊女卑などの観念と複合していた」（石原1982：130-131），「「家」においては長男が後継者となって多世代が同居したので，一層明確に性別役割が観察された」（松成1991：87）などとの理由から，付属的に「家」意識の研究で取り上げられている。しかし，「家」概念のなかの「家族内の不平等な人間関係」という特徴に注目するならば，より積極的に「家」意識研究のなかに位置づけるべき側面であり，むしろ他の様々な観点からの「性別役割」研究との重なりと分離が問われるべきであろう。

性　別　役　割

（一般的に）

(20)　「ところで，今日の日本では男女の地位が平等になっていると思いますか，それともまだ平等になっていないと思いますか。」
1. 平等になっている　2. 平等になっていない　3. わからない
（出典）総理府広報室「婦人に関する意識」（1972）／（引用文献）青井1974

（職業・家族外）

(21)　「一般的に女性が職業を持つことについて，どのようにお考えになりますか。この中ではどうでしょうか。1つだけあげてください。」
1. 女性は職業をもたないほうがよい　2. 結婚するまでは職業をもつほうがよい　3. 子どもができるまでは職業をもつほうがよい　4. 子どもができてもずっと職業を続ける　5. 子どもができたら職業をやめ，大きくなったら再び職業をもつほうがよい　6. わからない
（出典）総理府広報室「婦人に関する意識」（1972）／（引用文献）青井1974

(22)　「あなたの考えでは，女性も男性と同じように職業をもった方がよいと思いますか」
1. 職業をもった方がよい　2. 職業をもたない方がよい　3. 事情による
（出典）高橋正人「生活と意識に関する調査」（1985）／（引用文献）高橋1987

(23)　「妻も，仕事に就くなど積極的に社会参加すべきである」
1. そう思う　2. 大体そう思う　3. あまり思わない　4. 思わない

（出典）木下栄二「大都市マンション居住者の家族意識に関する調査」（1987）／（引用文献）木下1988

（家族内・家事分担）

(24) 「夫が台所仕事を手伝うことの是非，台所仕事のことを男の人が手伝うことについてはどうですか。賛成ですか，反対ですか。」

1. 賛成　2. 反対　3. 場合による　4. わからない

（出典）総理府「婦人と青少年についての調査」（1952）／（引用文献）石原1982，松成1991

(25) 「夫が台所仕事を手伝うことの是非，父親が台所の手伝いや子供のおもりをすることについて，どちらに賛成しますか。」

1. 台所の手伝いや子供のおもりは，一家の主人である男子のすることではない
2. 夫婦は互いに助け合うべきものだから，夫が台所の手伝いや子供のおもりをするのは当然だ

（出典）ＮＨＫ放送世論調査研究所「日本人の意識」／（引用文献）石原1982，松成1991

(26) 「共働きの場合，夫は食後のあとかたづけ，洗濯などの家事を妻と分担した方がよいと思いますか」

1. 分担した方がよい　2. 分担する必要はない　3. 場合による

（出典）高橋正人「生活と意識に関する調査」（1985）／（引用文献）高橋1987

（家族内・決定権）

(27) 「家族内で重要な出来事がある場合，最終的な決定は夫が下すべきである」

1. そう思う　2. 大体そう思う　3. あまり思わない　4. 思わない

（出典）木下栄二「大都市マンション居住者の家族意識に関する調査」（1987）／（引用文献）木下1988

リストには９個の質問文を掲載し，男女の不平等を「一般的に」問う質問(20)のほか，「家族外」（(21)～(23)）性別役割分業と「家族内」（(24)～(27)）の性別役割分業を問う質問を区分した。さらに家族内の場合，「家事分担」（(24)～(26)），「意志決定」(27)に関する質問がある。

④「先祖崇拝」：「先祖は家の永続のシンボルであり，子孫を守護すると共に，これをないがしろにしたり，遺訓に反する場合には，祟りをなすものと観念されてきた」（石原1982：130）というように，「先祖崇拝」は家の継承意識と並ぶ「家」意識測定の中心的な側面である。しかし，この側面に関しては変動を捉える難しさも指摘されている。すなわち，「先祖を尊ぶ」という

場合の「先祖」自体が指す意味内容が変化している場合，単純に回答比率のみを変動の指標とはできないという指摘である（森岡1980，石原1982，松成1991）。

先　祖　崇　拝

（先祖を尊ぶ・先祖供養）

(28)　「あなたはどちらかといえば，先祖を尊ぶ方ですか，それとも尊ばない方ですか。」
　1. 尊ぶ　2. 普通　3. 尊ばない方
（出典）統計数理研究所「国民性調査」／（引用文献）森岡1980，石原1982，松成1991

(29)　「先祖の祭りはやはり絶やしてはいけない」
　1. 賛成　2. 反対　3. どちらともいえない
（出典）光吉利之「異居親子関係に関する実証的研究」（1976）／（引用文献）光吉1986

(30)　「先祖を供養することは，子孫の義務である」
　1. そう思う　2. 大体そう思う　3. あまり思わない　4. 思わない
（出典）木下栄二「大都市マンション居住者の家族意識に関する調査」（1987）／（引用文献）木下1988

（先祖観）

(31)　「おまつりやご供養をしないと，神仏や先祖のたたりがあります。」
　1. 賛成　2. 反対　3. わからない
（出典）ＦＬＣ研究会「中高年の家族生活と世代間関係」（1982）／（引用文献）藤井1987

(32)　「先祖は子孫を守ってくれます。」
　1. 賛成　2. 反対　3. わからない
（出典）ＦＬＣ研究会「中高年の家族生活と世代間関係」（1982）／（引用文献）藤井1987

(33)　「先祖を供養することで，先祖が自分達を守ってくれていると思う」
　1. そう思う　2. 大体そう思う　3. あまり思わない　4. 思わない
（出典）木下栄二「大都市マンション居住者の家族意識に関する調査」（1987）／（引用文献）木下1988

リストには「先祖を尊ぶ・先祖供養」（(28)〜(30)），「先祖観」（(31)〜(33)）に分けて６個の質問文を載せたが，さらに先祖の意味内容を捉える設問の工夫も必要であろう。

⑤「相続」：この側面は，まさに「家」意識測定の中心であり，現実場面で

も問題となることが多いこともあって，取り上げた全ての研究で扱われている。リストアップした質問文数も21と最も多い。

相　続

（均分相続）

(34)　「財産や事業（店，工場，畑など）はどのように相続されるのがよいと思いますか。」

1. 長男または長女だけに　2. 将来めんどうをみてくれる子供だけに　3. 子供全部に平等に　4. わからない

（出典）毎日新聞社「全国家族計画調査」／（引用文献）青井1974，森岡1980，松成1991

(35)　「親の財産を子供に分ける時，どんな分け方をしたらよいと思いますか。」

1. 平等にやる　2.（長男偏重）長男だけ（家をつぐ者）にやる　3.（長男偏重）長男（家をつぐ者）に多く残りは平等にやる　4. 長男（家をつぐ者）に多く，残りは分に応じてやる　5. 長男に多く，下に行く程減少する　6. 親の世話をする者に多くやる　7. 本当に平等にするため能力のない子，生活に困る子に多くやる　8. 嫁にいったものは少なくする　9. その他

（出典）総理府国立世論調査所「家族制度に関する世論調査」（1953）／（引用文献）青井1974，石原1982，松成1991

(36)　「両親が亡くなった場合，財産はだれが優先して相続すべきだと思いますか。」

1. 長男　2. 子供全員に平等に分ける　3. 長男でなくとも家族のなかで親の面倒をみた人　4. 家族に限らず老後の面倒をみた人　5. 老後の面倒をみてくれた病院や福祉施設など　6. その他

（出典）毎日新聞社「家族・政治問題調査」（1988）／（引用論文）松成1991

（均分相続・長男優先）

(37)　「親が死んで財産を相続する場合，長男とかあととりは，他のきょうだい（兄弟姉妹）より多く分けるようにした方がよいと思いますか，それともその必要はないと思いますか。」

1. 長男またはあととりに多くわける　2. その必要はない　3. 事情による　0. わからない

（出典）家族問題研究会「現代家族の研究」（1956），ＦＬＣ研究会「中高年の家族生活と世代間関係」（1982）菅谷よし子「宮城県志波姫町調査」（1983）／（引用文献）小山1960，柏熊1960，菅谷1984，藤井1987

(38)　「財産はすべて長男が相続すべきだ」（伝統から近代への11段階評価（サーストン法））

（出典）家族問題研究会「現代家族の研究」（1956）／（引用文献）小山1960

(39)　「今の法律では，親の遺産を相続する場合，長男でも同じように分けること

になっていますが，長男とか跡取りには，他の兄弟よりも多く分けるようにした方がよいと思いますか，その必要はないと思いますか。」

1. 長男・跡取りは多く　2. その必要はない　3. わからない

（出典）総理府「家族法に関する世論調査」（1968）／（引用論文）青井1974，石原1982

(40)　「親が死んで財産を相続する場合，長男とかあととりには，他のきょうだい（姉・弟・妹）より多く分けるようにした方がよいと思いますか。それともその必要はないと思いますか。」

1. 長男（あとつぎ）に多く分ける　2. その必要はない　3. その他

（出典）森岡清美ら「勝沼調査」（1972，81，92）／（引用文献）松成1988，1989，堤1993

(41)　「家の財産はやはり長男一人だけが相続する方がよい」

1. 賛成　2. 反対　3. どちらともいえない

（出典）光吉利之「異居親子関係に関する実証的研究」（1976）／（引用文献）光吉1986

(42)　「（家族のあり方について次のような意見があります。あなたはそれぞれについて賛成でしょうか，それとも反対でしょうか。）家の財産はやはり長男一人だけに相続する方がよい」

1. 全く賛成　2. やや賛成　3. どちらともいえない　4. やや反対　5. 全く反対　6. DK

（出典）都市家族研究会「家庭生活に関する調査研究」（1982）／（引用文献）加藤1987，杉岡1989

(43)　「もし親が子供に財産を相続させる場合，長男とかあととりは，他のきょうだいより多く分けるようにした方がよいでしょうか」

1. 長男またはあととりに多く分ける　2. その必要はない　3. 事情による　4. DK

（出典）高橋正人「生活と意識に関する調査」（1985）／（引用論文）高橋1987

(44)　「親が死んで財産を相続する場合，長男またはあととりが，他のきょうだい（兄弟姉妹）よりも多くを相続するのは当然である」

1. そう思う　2. 大体そう思う　3. あまり思わない　4. 思わない

（出典）木下栄二「大都市マンション居住者の家族意識に関する調査」（1987）／（引用論文）木下1988

（均分相続・親の面倒をみる子）

(45)　「今の法律では，親の財産を子どもが相続する場合，子ども全部が平等にわけることになっていますが親の面倒をみる子どもには，ほかの子どもより多く分けるようにしたほうがよいと思いますか，その必要はないと思いますか。」

1. 親の面倒をみる子供には多くしたほうがよい　2. その必要はない　3. わからない

（出典）総理府広報室「婦人に関する意識」（1972）／（引用論文）青井1974

（均分相続・婚出した娘）

(46) 「親の遺産を分ける場合，嫁に行った娘にも財産を分けるようにした方がよいと思いますか，それとも分ける必要はないと思いますか。」

1. 分けるようにした方がよい 2. 分ける必要はない 3. わからない

（出典）総理府「家族法に関する世論調査」（1968）／（引用論文）青井1974

（均分相続・農家の場合）

(47) 「他の財産は別として田や畑などの農地は一人で全部うけついだ方がよいと思いますか，それとも分けても良いと思いますか。」

1. 分けない方がよい 2. 分けたくないがその時によって分けてもよい 3. 分けてもよい 0. 不明

（出典）農林省？「農地相続世論調査」（1951）／（引用文献）石原1982

(48) 「従来日本の農村では一般に長男が先祖の位牌をまもり，家の財産も一人でつぐのが普通とされてきましたが，そういうしきたりをどう思いますか。」

1. 長男が一人で相続するのが当然だ 2. 昔からの習慣だから長男が相続する 3. 結局長子相続になるのはしかたがない 4. 長男でなくともだれかが一人で相続するのがよい 5. 子どもの事情を考えて財産をわけるのがよい 6. 子どもたち全部で均等にわけるのがよい 7. その他 8. わからない，無回答

（出典）福武直ら「秋田・岡山調査」（1953, 1968, 1985）／（引用文献）柄沢1992

(49) 「今の法律では，農家でも子どもたちに財産を平等に分けることになっておりますが，田畑の場合は，特別に一人で相続した方がよいと思われますか。」

1. あとつぎ（あととり）が一人で相続する 2. 農業に従事する者だけに分ける 3. 男女みんなに分ける 4. その他

（出典）森岡清美ら「勝沼調査」（1972, 81, 92）／（引用文献）松成1988, 1989, 堤1993

（先祖代々の財産）

(50) 「自分の親からゆずられた土地や家屋などの不動産について次のような二つの意見があります。あなたはどちらの意見に近いですか。」

1. 家の財産だから代々受けついで守ってゆくべきだ 2. 家の財産であるとはいえ，自由に処分してもよい

（出典）ＦＬＣ研究会（中高年の家族生活と世代間関係」（1982），菅谷よし子「宮城県志波姫町調査」（1983）（引用文献）菅谷1984，藤井1987

(51) 「先祖代々の財産は，どんなことがあっても手放すべきではないでしょうか。それとも，そんなにこだわる必要はないでしょうか」

1. 手放すべきではない 2. こだわる必要はない 3. 事情による 4. ＤＫ

（出典）高橋正人「生活と意識に関する調査」（1985）／（引用論文）高橋1987

（郷里の家や土地）

(52) 「あととりが，都会で暮したいために，郷里にある家や土地を人手にわたすことは，やむを得ないことだと思いますが，それとも，よくないことだと思い

ますか。」
1. やむを得ない　2. よくない　3. 事情による　0. わからない
（出典）家族問題研究会「現代家族の研究」(1956)，ＦＬＣ研究会「中高年の家族生活と世代間関係」（1982）菅谷よし子「宮城県志波姫町調査」(1983)／（引用文献）小山1960，柏熊1960，菅谷1984，藤井1987
(53)　「あととりでも町に出て働きたければ田舎の家をたたんで出たらよい」（伝統から近代への11段階評価（サーストン法））
（出典）家族問題研究会「現代家族の研究」（1956）／（引用文献）小山1960
(54)　「あととりが都会で暮していたら，郷里にある家や土地を人手にわたすことはやむを得ない」
1. そう思う　2. 大体そう思う　3. あまり思わない　4. 思わない
（出典）木下栄二「大都市マンション居住者の家族意識に関する調査」（1987）／（引用論文）木下1988

内容をみると大きくは「均分相続」((24)～(49))，「先祖代々の財産」(50, 51)，「郷里の家や土地」((52)～(54)) に関する質問に区分できる。さらに「均分相続」に関する質問群は，相続形態一般 ((34)～(36))，「長男優先」の是非 ((37)～(44))，「親の面倒をみた子優先」(45)，「婚出した娘の相続」(46) を問題にするものに区分できる。また，農家の場合に限定した質問 ((47)～(49)) も「均分相続」に関する質問のなかに含めた。

⑥「同居」：「長男が嫁を迎えて親と同居する直系家族の形態が伝統的な家制度のひとつのあらわれとみられてきた」（石原1982：126）と言われ，「家」を居住規則から捉えた場合の「直系制家族」を示す側面でもある。この側面も取り上げたほとんどの研究で扱われており，リストに載せた質問文数も「相続」についで19と多い。

同　居

（一般的）
(55)　「話しは変りますが，子供が大きくなって結婚したら，親夫婦と子供夫婦とは別に暮した方がよいと云う人がありますが，あなたもそう思いますか，そうは思いませんか。」
1. そう思う（別居）　2. そうは思わない（同居）　3. 一概にいえない　0. 不明
（出典）総理府国立世論調査所「老後の生活についての世論調査」（1953）／（引用論文）青井1974

(56) 「一般的にいって，子供のうち誰か一人は一緒に暮して，親の面倒をみた方がよいと思いますか。それとも生活費さえ十分にみてやれば一緒に暮らす必要はないと思いますか。」

1. いっしょに暮らした方がよい 2. 一緒に暮らす必要はない 3. わからない

(出典) 総理府「家族制度に関する世論調査」(1956)，総理府「家族法に関する世論調査」(1968)

(引用論文) 青井1974，森岡1980，石原1982，松成1991

(57) 「あなたは，一般的に言って，老後は子供と同居した方がよいと思いますか，それとも別居した方がよいと思いますか。」

1. 同居した方がよい 2. 別居した方がよい 3. 一概にいえない 4. わからない

(出典) 総理府「社会福祉」(1982) ／ (引用論文) 松成1991

(58) 「あなたの現在の生活は別にして，老後の生活は子供と同居したほうがよいとお考えですか。それとも別居したほうがよいとお考えですか。」

1. 同居したほうがよい 2. 別居したほうがよい 3. 一概にいえない 4. わからない

(出典) 総理府「長寿社会における男女別の意識の傾向に関する調査」(1989) ／ (引用論文) 松成1991

(59) 「あなたのご意見では，結婚してからも親と一緒に暮すのと，親子別々に暮すのとでは，どちらがよいと思いますか。」

1. 同居がよい 2. 別居がよい 3. 事情による 0. わからない

(出典) 家族問題研究会「現代家族の研究」(1956) ／ (引用論文) 小山隆1960

(60) 「あなたの考えでは，結婚してからも親と一緒に暮らすのと，親子別々に暮らすのとでは，どちらかがよいと思いますか」

1. 同居がよい 2. 別居がよい 3. 事情による

(出典) ＦＬＣ研究会「中高年の家族生活と世代間関係」(1982)，高橋正人「生活と意識に関する調査」(1985) ／ (引用論文) 高橋1987，藤井1987

(61) 「(家族のあり方について次のような意見があります。あなたはそれぞれについて賛成でしょうか，それとも反対でしょうか) こどもは結婚したら，お互いに干渉しないために親と別々に暮らすのがよい」

1. 全く賛成 2. やや賛成 3. どちらともいえない 4. やや反対 5. 全く反対 6. ＤＫ

(出典) 都市家族研究会「家庭生活に関する調査研究」(1982) ／ (引用論文) 加藤1987，杉岡1989

(望ましさの基準として) ――――――――――――――――――――――――――――

(62) 「子供は結婚したら両親と別に生活することが望ましい」(伝統から近代への11段階評価 (サーストン法))

(出典) 家族問題研究会「現代家族の研究」(1956) ／ (引用論文) 小山隆1960

(63) 「(同別居の可否を両親とも健在の場合と父母のどちらか一方になった場合に

わけて尋ねる）子供夫婦と年とった親との同居についておききします。(1)まず，あなたは，年とった親が夫婦とも健康な場合には，この中ではどれが一番望ましいと思いますか。　(2)では，年とった親のうちどちらかがすでに亡くなっている場合には，この中ではどれが一番望ましいと思いますか。」

1. 子供夫婦と同居する（台所，トイレも一緒）　2. 子供夫婦と同居する（台所，トイレは別）　3. 子供夫婦の住宅の同じ敷地内またはすぐそばに住む　4. 子供夫婦の住宅と同一市町村に住む　5. 子供夫婦の住宅とは遠く離れて住む（子供夫婦の住宅とは関係なく住む）　6. わからない

（出典）総理府「家庭基盤の充実」（1979）／（引用論文）石原1982

(64)　「あなたは，老後生活の理想として，子供と同居するのがよいと思いますか，別居するのがよいと思いますか」

1. 同居　2. 別居　3. その他（　　）

（出典）高橋正人「生活と意識に関する調査」（1985）／（引用論文）高橋1987

(65)　「老後は子や孫と一緒に暮すことが望ましい」

1. そう思う　2. 大体そう思う　3. あまり思わない　4. 思わない

（出典）木下栄二「大都市マンション居住者の家族意識に関する調査」（1987）／（引用論文）木下1988

（規範的に）

(66)　「あなたの意見では，子供が結婚してから親と一緒にくらすのと，別居するのとでは，どちらをとるべきと思いますか。」

1. 同居すべき（である）　2. 別居すべき（である）　3. 事情による　0. DK（わからない）

（出典）森岡清美ら「勝沼調査」（1972，81，92）／（引用論文）松成1988，1989，堤1993

(67)　「子供のうち誰か一人は，結婚しても両親と同居すべきである」

1. そう思う　2. 大体そう思う　3. あまり思わない　4. 思わない

（出典）木下栄二「大都市マンション居住者の家族意識に関する調査」（1987）／（引用論文）木下1988

（規範的に・長男）

(68)「（家族のあり方について次のような意見があります。あなたはそれぞれについて賛成でしょうか，それとも反対でしょうか。）同居して親の面倒をみるのは長男の責任である」

1. 全く賛成　2. やや賛成　3. どちらともいえない　4. やや反対　5. 全く反対　6. DK

（出典）都市家族研究会「家庭生活に関する調査研究」（1982）／（引用論文）加藤1987，杉岡1989

（自らの構え・親の立場）

(69)　「（「60歳以上」を除いた者に）あなたの希望としては，老後はできればお子

さんと同居したいと思いますか，できれば別居したいと思いますか。」

1. できれば同居したい　2. できれば別居したい　3. 子供はいない・わからない

（出典）総理府「家族法に関する世論調査」（1968）／（引用論文）青井1974

(70)　「(18～49歳の人と，50歳以上でも親がかりの子のある人にのみたずねる) あなたは，老後働けなくなったら，どのような生活をしたいと思いますか。お子さんと同居したいと思いますか。夫婦（自分）だけで暮らしたいと思いますか，それとも老人ホームなどのような施設にはいりたいと思いますか。」

1. 子どもと同居したい　2. 夫婦（自分）だけで暮らしたい　3. 老人施設にはいりたい　4. その他　5. わからない

（出典）総理府「婦人に関する意識」（1972）／（引用論文）青井1974

(71)　「(子供のいる者のみ) あなたは，結婚したお子さんと同居する考えがありますか。この中ではどうですか。」

1. 子供が結婚したら同居したい　2. 自分の心身が衰えたら同居したい　3. 配偶者を亡くしたら同居したい　4. 同居はしないが近くに住みたい　5. 同居も近くに住むつもりもない　6. その他　7. わからない

（出典）総理府「戦後ベビーブーム世代の生活意識」（1989）／（引用論文）松成1991

（自らの構え・親の立場・長男）――――――――――――――――――――

(72)　「(「一緒に暮らした方がよい」と答えた者に) 一緒に暮らすとすれば，長男が一緒に暮らした方がよいと思いますか，別に長男でなくてもどの子でもよいと思いますか。」

1. 長男と　2. 特定のその他の子　3. どの子供でもよい　4. わからない

（出典）総理府「家族法に関する世論調査」（1968）／（引用論文）青井1974

（自らの構え・子どもの立場）――――――――――――――――――――

(73)　「結婚後は親と同居したいと思いますか，それともぜひ２人だけで生活したいと思いますか。」

1. 親と同居したい　2. ぜひ２人だけで生活したい　3. どちらでもよい　4. わからない

（出典）総理府「婦人に関する意識」（1972）／（引用論文）青井1974

この質問群では，取り上げられている事柄についての区分よりも質問内容の指す意識のレベルの違いが注目できる。まず大きくは「一般的に同居の可否」（(55)～(61)）を問う形，「望ましさの基準」（(62)～(65)）として問う場合と「規範的に」（(66)～(68)）問う形，そして「自らの構え」（(69)～(73)）として問う形に分かれる。また，「規範的に」問う場合も，「子供のうち誰かひとりと」(66, 67)とするものと「長男」(69)を特別に取り上げ

るものとでは，「家」意識の内容が全く異なる。さらに，「自らの構え」といっても「親の立場」((69)〜(72)) と「子の立場」(73)での発想は当然別個のものである。

「同居」についても，「先祖崇拝」と同じく変動を捉える困難さが指摘される。森岡は「同居支持といっても，かならずしも家意識と重ねあわせうるものではなく，いっしょに暮らして親の老後をみることに力点があるとすれば，ここにも大きな変化が隠されているといえる」(森岡1980：127) と述べ，「同居」支持内容の検討の必要を指摘している。

⑦「配偶者の選択」：姫岡勤は日本における結婚の変化を捉える類型の一つに「家族主義の結婚（イエ本位の結婚)」をおき，それを「(結婚は) 家族（イエ）の繁栄と永続のための手段と考えられ，家族の代表者である家長に結婚決定権が集中する。家格・家柄のつりあいが重視され，同格の家を求めて遠方婚が多くなる」（姫岡1976：77）と規定している。このように配偶者選択も，「家」意識と密接な関係をもつ。

配偶者の選択

（自らの構え）

(74)　「あなたは，結婚の相手はぜひとも自分でみつけたいと思いますか，それとも，親やまわりの人から紹介してもらいたいと思いますか。（しいていえばどうでしょうか)」

1. ぜひとも自分でみつけたい　2. 親やまわりの人から紹介してもらいたい
3. どちらでもよい・わからない

（出典）総理府「婦人に関する意識」（1972）／（引用論文）青井1974

（親の意見）

(75)　「子どもの結婚相手については，あくまで子どもの意思に任せるほうがよいと思いますか，それとも親の目がねにかなった人と結婚させたいと思いますか，しいていえばどちらでしょうか。」

1. 子どもの意思に任せるほうがよい　2. 親の目がねにかなった人　3. 一概にいえない　4. わからない

（出典）総理府「婦人に関する意識」（1972）／（引用論文）青井1974

(76)　「結婚は，当人どうしの愛情と同じくらい，親の意向が重要だと思いますか」

1. 重要だと思う　2. 思わない　3. 事情による　4. DK

（出典）高橋正人「生活と意識に関する調査」（1985）／（引用論文）高橋1987

(77) 「子供は結婚相手を決めるにあたって，親の意見を尊重すべきである」

1. そう思う 2. 大体そう思う 3. あまり思わない 4. 思わない

（出典）木下栄二「大都市マンション居住者の家族意識に関する調査」（1987）／（引用論文）木下1988

（親の意見・あととりの結婚）

(78) 「農家のあととりが結婚するとき，お嫁さんは親が決める方がよいと思いますか。それともあととり本人の自由にまかせた方がよいと思いますか。」

1. 親が決めるのがよい 2. 本人の希望をきいて，親が決めるのがよい 3. 親の意見を聞いて本人が決めるのがよい 4. 本人が決めるのがよい

（出典）森岡清美ら「勝沼調査」（1966, 72, 81, 92）／（引用論文）松成1988, 1989, 堤1993

(79) 「あととりの嫁をもらう場合に，次のような意見があります。あなたはどれがよいと思いますか。」

1. 親子同居しているのだから，親の意見を大切にすべきだ 2. 昔からのやり方だから，親の意見を尊重すべきだ 3. 子供にまかせたのでは心配だから，親が考えてやった方がよい 4. 子供の意見を尊重しながら，親がきめる 5. 親の意見を参考にしながら，本人がきめる 6. 本人の自由にまかせる 7. その他 8. わからない（含無回答）

（出典）福武直ら「秋田・岡山調査」（1953, 68, 85）／（引用論文）柄沢1992

（家柄等への考慮）

(80) 「結婚は当人どうしの愛情だけでなく，身分や家柄などのつりあいを考えてした方がよいと思いますか

1. 身分，家柄などを考えた方がよい 2. 愛情だけでよい 3. 事情による 4. DK

（出典）高橋正人「生活と意識に関する調査」（1985）／（引用論文）高橋1987

(81) 「結婚に際しては，相手の人柄だけでなく，家柄や財産など家格のつりあいにも考慮する必要がある」

1. そう思う 2. 大体そう思う 3. あまり思わない 4. 思わない

（出典）木下栄二「大都市マンション居住者の家族意識に関する調査」（1987）／（引用論文）木下1988

リストには，「自らの構え」(74)についての質問のほか，「親の意見尊重」((75)～(79))，「家柄等への配慮」(80, 81)に関する8個の質問文を掲載した。また，「親の意見尊重」を問う質問のなかには，単に「子供」((75)～(77))として問うものと，「あととり」(78, 79)に限定して問うものの2種

類が含まれている。

⑧「扶養」:「継承に値する恒産のない場合でも世代交代のさいに「家」の継承が問題になるのは，「老親をだれが扶養するか」ということが重要な問題であったからである」（松成1991：87）との指摘にあるように，「扶養」という側面は多くの人々にとって身近であり，14個の質問文をリストアップした。

扶　養

（一般的に）

(82)　「子供が老父母のめんどうをみることをあなたはどう思いますか。」
1. よい慣習（しきたり）だと思う　2. 子供としてあたりまえの義務だと思う
3. 老人のための施設（養老院）や制度（年金など）がないからやむをえない
4. よい慣習（しきたり）と思わない　5. わからない　6. その他
（出典）毎日新聞社「全国家族計画調査」(1950, 52, 55以後隔年」／（引用論文）石原1982, 松成1991

(83)　「あなたは，子供が年をとった親を扶養することについてどのように考えていますか。次の中ではどの考えに近いでしょうか。」
1. 子供は，どんなことがあっても年とった親を扶養すべきである　2. 子供に余力があれば，年とった親を扶養すべきである　3. 税金や保険料を支払っているのだから，公的機関が老後をみるべきであるので，子供は年とった親を扶養しないでもよい　4. 親は親でやっていくべきであるので，子供は年とった親を扶養しなくてもよい
（出典）ＦＬＣ研究会「中高年の家族生活と世代間関係」(1982)，菅谷よし子「宮城県志波姫町調査」（1983）／（引用論文）菅谷1984，藤井1987

(84)　「結婚した子どもは親の近くに住んでお互いに助けあうべきだ」
1. 全く賛成　2. やや賛成　3. どちらともいえない　4. やや反対　5. 全く反対
6. ＤＫ
（出典）都市家族研究会「家庭生活に関する調査研究」（1982）／（引用論文）加藤1987

(85)　「親が重病のときには，子どもはたとえ遠く離れていても，かけつけて世話をするべきだ」
1. 全く賛成　2. やや賛成　3. どちらともいえない　4. やや反対　5. 全く反対
6. ＤＫ
（出典）都市家族研究会「家庭生活に関する調査研究」（1982）／（引用論文）加藤1987

(86)　「成人した子供に親の世話をする義務はないという意見がありますが，あなたはその意見に賛成ですか，反対ですか」

1. 賛成する　2. 反対する　3. 事情による

（出典）高橋正人「生活と意識に関する調査」（1985）／（引用論文）高橋1987

(87)　「親が高齢になったさい，子供はどんなことをしても年取った親を扶養すべきである」

1. そう思う　2. 大体そう思う　3. あまり思わない　4. 思わない

（出典）木下栄二「大都市マンション居住者の家族意識に関する調査」（1987）／（引用論文）木下1988

（一般的に・長男）――――――――――――――――――――――――――――――――

(88)　「親が年とったり，病気になったりして暮らしに困っている場合，子供の中の誰が一番責任をもって，世話をすべきでしょうか。」

1. 長男（またはあととり）　2. 長男（またはあととり）及び独立している男子　3. 子供の全部（婚出，縁出を含む）　4. その他　5. わからない

（出典）家族問題研究会「現代家族の研究」(1956)，森岡清美ら「勝沼調査」（1972，1981，1992）ＦＬＣ研究会「中高年の家族生活と世代間関係」（1982），菅谷よし子「宮城県志波姫町調査」（1983）

（引用論文）小山1960，柏熊1960，菅谷1984，藤井1987，松成1988，1989，堤1993

(89)　「両親の生活は主として長男が見るべきだ」（伝統から近代への11段階評価（サーストン法））

（出典）家族問題研究会「現代家族の研究」（1956）／（引用論文）小山1960

(90)　「それでは，親が年をとって，病気になったり，暮らしに困ったりして，誰かの世話が必要になった場合，子供のうちの誰に一番の責任があるのでしょうか」

1. 長男（またはあととり）　2. 長男（またはあととり）と独立している男子　3. 子供の全部（婚出，縁出を含む）　4. 娘　5. 子供に責任はない（ＳＱどうすればよいですか）　6. ＤＫ

（出典）高橋正人「生活と意識に関する調査」（1985）／（引用論文）高橋1987

(91)　「親が年取ったり病気になったりして暮しに困っている場合，長男またはあととりが一番責任をもって世話をすべきである」

1. そう思う　2. 大体そう思う　3. あまり思わない　4. 思わない

（出典）木下栄二「大都市マンション居住者の家族意識に関する調査」（1987）／（引用論文）木下1988

(92)　「長男がなくなった場合，二・三男などが親を扶養するより，長男の子が祖父を扶養すべきである」

1. 賛成　2. 反対　3. どちらともいえない

（出典）光吉利之「異居親子関係に関する実証的研究」（1976）／（引用論文）光吉1986

（自らの構え・親の立場）――――――――――――――――――――――――――――――――

(93)　「もしかりに子供があったり将来子供ができるとすれば老後の生活を子供に

たよりたいと思いますか」
1. たよりたいと思う　2. たよりたくないと思う　3. わからない
（出典）毎日新聞社「全国家族計画調査」（1950, 52, 55以後隔年）／（引用論文）石原1982
(94)　「あなたは老後のくらしを子供にたよるつもりですか」
1. たよるつもり　2. たよらないつもり　3. 考えたことがない
（出典）毎日新聞社「全国家族計画調査」（1950, 52, 55以後隔年）／（引用論文）森岡1980, 松成1991
（自らの構え・子どもの立場）
(95)　「あなたは，年老いた親を養うことについてどのように思いますか。このカードの中であなたの考えに近いものを，ひとつだけ選んでください。」
1. どんなことをしてでも親を養う　2. 自分の生活力に応じて親を養う　3. なるべく親自身の力や社会保障にまかせる　4. 一切親自身の力や社会保障にまかせる
（出典）総務庁青少年対策本部「世界青年意識調査」／（引用論文）石原1982, 松成1991

ここでも同居と同じく事柄の区分よりも，意識の測定のレベルによって質問項目を区分できる。まず「一般的に」（(82)〜(92)）問う形と，「自らの構え」（(93)〜(95)）として問う形に大別できる。また「一般的に」というなかにも，兄弟順位を限定しないで「子どもによる扶養」（(82)〜(87)）を問うものと，「長男（またはあととり）の扶養」（(88)〜(92)）を問う質問は区分できる。さらに「自らの構え」も「親の立場」(93, 94)と「子の立場」(95)では全く違ったことを測定していると言えよう。

D.　「家」意識測定上の留意点の整理

ここでは，すでに指摘した点も含めて質問文の検討からみた家族意識測定の問題点について若干整理しておきたい。

(1)測定する意識のレベルの問題：

全国レベルの世論調査から家族意識の動向を捉えようとした石原邦雄は，「同じ規範につながる側面でも，望ましさの基準（子が親の老後の世話をするのはよい習慣だ，など）と自らの行動の構え（老後を子に頼るつもり，な

ど）では変化に大きなズレが生じる。」（石原1982：132）ことを指摘し，測定している意識のレベルへの注意を喚起している。

同じ側面，同じ事柄に関する質問でも，「～すべき」という形式でまさに「規範」意識を問う場合と，「～は望ましい」というレベルで問う場合，さらに「あなたは～したいと思うか」という形で「自らの構え」を問う場合では，測定する意識のレベルが異なるため，単純な比較対象は困難であり，結果の解釈も変えねばならない。

今後の調査および調査結果への解釈では，意識をどのレベルで測定し，どのレベルで測定した結果として解釈するかという検討も，さらに意識的になされる必要があろう。

(2)変動を測定するための問題：

この点も，既に森岡清美（森岡1980）や石原邦雄（石原1982）によって指摘されているが，変動を測定するためには極めて重要かつ厄介な問題が存在する。これは「先祖崇拝」や「同居」にみられるように，表面的な支持率は変化しなくとも，項目の意味内容自体の変化が想定される場合である。変動を測定するためには，同一指標による時系列変化を追うことが最善であるが，この場合は，それだけでは事態を見誤るおそれが生じてしまう。

また，この問題は変動測定のほか，国際比較調査にもあてはまる。石原邦雄は扶養に関する国際比較調査（「世界青年意識調査」）の検討から，「伝統的家族意識としての家制度的な観念が崩れてきたことを捉える図式が，そのまま日本の家族の西欧化を含蓄する場合が多いけれども，この点については吟味が必要である。」と述べ，「伝統を示すと考える答えが，必ずしもそれに対応しない別の文脈から出てくることがありうるし，他方，伝統型からの脱却と考える答えが，必ずしも漠然と理想化された西欧化モデルに対応しているとも限らないという点」（石原1982：129）への注意を促している。

この点に関しては，もとの概念をより適切に反映する設問の工夫のほか，他の設問との相関関係や因子分析等を適用して，項目の意味内容の検討が必

要とされる。

(3)家族生活の諸側面から意識を測定する際の問題：

本稿では，質問文を8側面で整理したが，必ずしもこの分類が確定的であるというわけではない。しかし一方，家族の何らかの側面を取り上げる以外に，家族意識を測定することは難しい。次に家族生活の諸側面から意識を測定する際に生じると思われる問題について考えておきたい。

①側面と規範との関連：坂本佳鶴恵（坂本1990ａ）は，長男扶養意識に関する各種調査データが矛盾した結果を示すことに着目し，「家」意識に基づく長男扶養を問う設問がそれぞれ異なり，長男扶養意識の中に二つの規範意識（長男扶養規範と長男責任規範）が混在していて，ある設問は長男扶養規範（例：「親の面倒は長男がみるべきである」など）を，ある設問は長男責任規範（例：「親が年取ったり病気になったりして暮らしに困っている場合，長男またはあととりが一番責任をもって世話をすべきである」など）に関する意識を測定していることが矛盾の原因であると指摘している。

同じ側面や事柄を扱う設問でも，設問の仕方によって測定している内容が異なっている場合があることにも注意が必要である。

②質問文と側面との関連が多義的な場合：全く同一の質問文が別の側面を捉えるものとして扱われている場合もある。一例を示すと，「同居して親の面倒をみるのは長男の責任である」という質問が，「同居」を示す場合（加藤1987，杉岡1989）と「扶養」を示す場合（坂本1990ｂ）の二通りの使われ方をしている。これは調査技術上のダブルバーレル（「同居して」「面倒をみる」）の問題でもあるが，そもそも「同居」と「扶養」を分離した側面とおくかどうかの問題にもつながろう（高橋(1987)，木下(1988)の因子分析では「同居」「扶養」は同一因子を構成している)。質問文が示す論点を限定する努力とともに，家族生活の諸側面を，測定しようとする家族意識との関連で，どのように整理するかということ自体が問題とされねばならない。

③家族生活諸側面の変化に対応して設問の工夫が必要とされる場合：ここで

取り上げた8側面全てが，「家」意識測定のために同じウェイトで扱われているわけではない。例えば「家業の継承」は18本中3本の論文でしか扱われていない。これは家業というもの自体が少なくなってきている現実と対応していると考えられるが，農業継承の問題や開業医・弁護士あるいは政治家等のエリート層では二世問題という形で，親から子への継承が話題となるように，家業の継承がなくなったというわけではない。

社会状況の変化のなかで，見えにくくなっている側面もあるが，さらに設問の工夫が必要な場合も多いのではないだろうか。

(4)その他

そのほか，本稿でリストアップした質問文から気づく「家」意識測定の際の留意点を2点だけ述べておきたい。一つは，女性の観点からの設問が少ないことである。嫁姑関係あるいは主婦権など，女性にも「家」と関連した事柄は多い。女性の視点から「家」そのものを見直す必要もあるのではないだろうか。また，本稿では回答の選択肢についての検討が不十分であった。尺度化を目指しているのか，あるいはどんな調査法（面接法か郵送法か，など）を用いるのか，といった点から回答選択肢についての検討も必要であろう。

E. 小　　括

本稿では，家族意識研究の展開を整理する試みの一つとして，「家」意識研究における測定の問題に限定して，既存の質問文を分類して提示するとともに，家族意識測定の際の問題点についての若干の整理を試みた。整理自体に不十分な点もあり，ここでなんらかの結論を示すことはできない。

しかしまた，多くの質問文を並べることで，資料的な価値とは別に，なぜこれらの設問群が「家」意識を測定できるのか，これらの設問群が測定してきた「家」意識，あるいは「家」とは何なのかという，問題設定や概念構成の再検討の必要性を浮き彫りにしたのではないだろうか。概念上の問題は大

きくは二つあろう。一つは，「家」との関連で，家族や家族生活の側面あるいは事柄を，どのように体系的に整理可能かという問題の検討が，特に実際の測定を考える場合には必要である。そして，この問題を検討するためにも，「家」概念自体の検討と，なぜ「家」を問題にするのかという問題設定自体の再検討が必要である。「家」をある種の社会状況のなかで実在する実態概念と捉えるのか，それとも理念型的な分析概念として，現代家族や現代社会の構造把握の武器として用いるのか，もう一度，検討し直す必要があろう。

次回は，本稿で取り上げられなかった多くの研究も含めて，「家」意識研究における問題設定と概念構成についての再検討を試みたいと考えている。

（追記）本稿は，第4回日本家族社会学会大会（1994年9月5，6日，於・甲南女子大学）のテーマセッション第2部会「家族研究のための測定・解析を考える」における報告を，加筆修正したものである。

（文　献）

質問文リスト作成の検討対象とした文献

小山隆，1960，「家族の形態」小山隆（編）『現代家族の研究』弘文堂，53～72ページ。

柏熊岬二，1960，「家の意識」小山隆（編）『現代家族の研究』弘文堂，73～92ページ。

青井和夫，1974，「戦後日本の家族観の変遷」青山道夫他（編）『講座家族8家族観の系譜』弘文堂，163～184ページ。

田村喜代，1974，「家族意識の変化」家族問題研究会（編）『現代日本の家族—動態・問題・調整—』培風館，95～112ページ。

森岡清美，1980，「戦後の家族構成の変化と家意識の崩壊」『歴史公論』50号，122～127ページ。

石原邦雄，1982，「戦後日本の家族意識——その動向と研究上の問題点——」『家族史研究』6号，大月書店，118～139ページ。

菅谷よし子，1984，「家族意識の世代・コーホート分析」『宮城学院女子大学・研究論文集』61号，23～47ページ。

光吉利之，1986，「異居親子家族における「家」の変容——親家族と「あとつぎ」家族——」神戸大学社会学研究会（編）『社会学雑誌』3号，36～55ページ。

加藤喜久子，1987，「都市における家族意識変化の社会的基盤」『家族研究年報』13号，

35～49ページ。
高橋正人，1987，「老人の家族意識――東京都葛飾区東水元地区の事例をとおして――」『老年社会科学』Vol. 9，82～95ページ。
藤井廣美，1987，「家族意識の世代間・世代内比較―伝統的意識の継承過程―」森岡清美・青井和夫（編）『現代日本人のライフコース』日本学術振興会，267～285ページ。
木下栄二，1988，「家族意識の構造・要因分析――大都市マンション居住者の場合」『家族研究年報』14号，44～59ページ。
松成　恵，1988，「農村家族における15年間の家族意識の変化（第一報）」『山口女子大学研究報告（第２部自然科学）』第14号，39～51ページ。
松成　恵，1989，「農村家族における15年間の家族意識の変化（第二報）」『山口女子大学研究報告（第２部　自然科学）』第15号，51～64ページ。
杉岡直人，1989，「家族規範パラダイムの再考」家族社会学セミナー（編）『家族社会学研究』創刊号，43～53ページ。
松成　恵，1991，「戦後日本の家族意識の変化――全国規模の世論調査報告を資料として――」家族社会学セミナー（編）『家族社会学研究』No. 3，85～97ページ。
柄澤行雄，1992，「家意識」高橋明善・蓮見音彦・山本英治（編）『農村社会の変貌と農民意識30年間の変動分析』東京大学出版会，204～218ページ。
堤マサエ，1993，「家族意識の変化と「家」の継承――20年間の反復調査分析――」『山梨県立女子短大紀要』第26号，103～123ページ。

その他の引用・参考文献

経済企画庁国民生活局編，1994，『家庭と社会に関する意識と実態調査報告書』大蔵省印刷局
坂本佳鶴恵，1990ａ，「長男扶養に関わる２つの規範――「家」意識の意味」東京都老人総合研究所編『社会老年学』32，東京大学出版会，
坂本佳鶴恵，1990ｂ，「扶養規範の構造分析――高齢者扶養意識の現在――」家族社会学セミナー編『家族社会学研究』第２号，57～69ページ。
ニッセイ基礎研究所，1994，『現代社会と家族の変容に関する研究３都市の家族とパーソナルネットワーク』
姫岡勤，1976，「婚姻の概念と類型」大橋薫・増田光吉（編）『改訂家族社会学』川島書店，56～83ページ。
正岡寛司，1976，「家と同類と親族」森岡・山根（編）『家と現代家族』培風館，230－256。

森岡清美，1976，「社会学からの接近」森岡・山根（編）『家と現代家族』培風館，2-22。
森岡清美，1993，『現代家族変動論』ミネルヴァ書房。

Rethinking about Development of Family Consciousness Studies (1)
——Measurement of "ie" Ideology——

Eiji Kinoshita

With increase of importance of family consciousness studies need to pay off existing family consciousness studies occurs, too. I discussed this paper about a problem of measurement in "ie" Idology studies as a part of work that rethinking development of family consciousness studies.

Primarily, in this paper, a list uped question sentence used by studies as before. Second, I tried rearranging about problems of case of measurement.